

研究ノート

音楽科授業を対象とした 「逐語記録に基づく授業分析」による分析事例の検討

—研究の問い・分析手続き・説明仮説—

A Study of the Analysis Cases Using “Lesson Analysis Based on Verbatim Records” for Music Classes

—The Research Question, Analytical Procedures and Explanatory Hypothesis—

横山真理*

Mari YOKOYAMA

キーワード：音楽科授業、「逐語記録に基づく授業分析」、アブダクション

Keywords: music classes, lesson analysis based on verbatim records, abduction

要約

本研究では、「逐語記録に基づく授業分析」に依拠して音楽科授業の分析を行っている授業分析者は、どのような研究の問いを立て、どのような分析の手続きによって授業記録を解釈しているのか、研究の過程でどのような説明仮説が形成されているのか、分析事例に基づき個別具体的に明らかにすることを目的とした。研究の問いの特徴として以下の3点を見出した。1) 学び手の音楽表現への共感を起点に研究の問いが設定されている。2) 学び手の音楽表現と内面が連動して構成されていく動的な過程のメカニズムを解明するために研究の問いが設定されている。3) 研究の問いを設定し研究する過程で、学習経験と指導の過程に機能する外的あるいは内的な授業諸要因に関する説明仮説が形成されている。分析の手続きとして、映像記録の収集、分析資料（逐語記録、授業記録、分析図表）の作成、分析場面の選定、分節分け、抽出する個やグループの選定、分析視点の設定、解釈の記述ルールの明示を取り出した。

Abstract

The purpose of this study was to clarify what kind of research questions the lesson analysts who rely on “lesson analysis based on verbatim records” to analyze music lessons, what kind of analysis procedures they use to interpret class records, and what explanatory

* 東海学園大学教育学部教育学科

hypotheses are formed in the course of the research, based on analysis examples. The following three points were found as characteristics of the research questions. 1) Research questions are set based on the student's empathy for musical expression. 2) Research questions are set to elucidate the mechanism of the dynamic process in which the learner's musical expression and inner world are linked together. 3) In the process of setting and researching research questions, explanatory hypotheses are formed about the external and internal teaching factors that impact the learning experience and teaching process. The analysis procedure included the collection of video recordings, the preparation of analysis materials (verbatim records, class records, and analysis charts), the selection of analysis scenes, segmentation, selection of individuals and groups to be extracted, the setting of analysis perspectives, and the clarification of the rules for writing interpretations.

1 研究の背景

1-1 授業分析の定義・意義・方法

学校教育の場に位置付く音楽科授業の創造的実践にとって、実践者である教師や実践に関与する研究者による授業研究は欠かせない。そのような音楽科授業の創造的実践に寄与する授業研究の一つに、授業分析がある。理論と実践の往還を本質とした音楽教育実践学における授業分析とは、「授業実践の詳細な観察と記録に基づいて教師や子どもの諸活動を分析し、発言や記述、活動、その他の諸事象の背後にある論理を探究し、得られた学術的知見をより良い授業の創造的実践に循環させることを自覚した、授業研究の方法の一つである」（横山 2017, p.224）と定義される。授業分析者はより良い授業実践の創造に貢献することを念頭に置きつつ、理論と実践を往還させながら研究の問い（リサーチ・クエスション）を設定して研究し、学術的な知見を得ようとする。

授業を分析して知見を得る研究方法は、量的な研究アプローチと質的な研究アプローチに大別される。本研究で取り上げる「逐語記録にもとづく授業分析」は、重松鷹泰が1961年に『授業分析の方法』（重松 1961）を出版して以来、名古屋大学教育方法学研究室によって継承・発展されてきた研究方法の理論である。それは、授業実践記録を収集し記録に基づいて授業実践の諸事象を解釈することにより知見を得ようとするため、質的な研究アプローチに区分される。「逐語記録に基づく授業分析」の研究方法论は、既存の教育理論ではなく授業実践の事実から出発するという基本的立場をとっている。授業実践の事実、まさに授業が行われている教師の教えと学習者の学びの場にあるのだが、そこから出発するということは、「逐語記録を中心とする授業の詳細かつ客観的な記録が重視され」（柴田 2013, p.21）、その記録の分析によって洞察を得るということに他ならない。このことに関して横山（2023）では、「逐語記録に基づく授業分析」の基本的観点として、第一に授業実践の客観的な記録の重視、第二に詳細な分析と解釈の連続、第三に相互規

定性に基づく授業諸要因の関連構造的な把握、の三点が見出されている。

横山があげた「逐語記録に基づく授業分析」の基本的観点のうち、観点1に関しては、音楽科授業において言語情報中心の逐語記録だけでは不十分であり、言語・身体動作・演奏など内的な思考・イメージ・感情を媒介する言語情報と非言語情報を統合的に把握した記録を作成し分析資料とすることが重要であることが指摘され、このような記録を逐語記録と区別する意味で「逐語記録を中心とした授業実践の諸記録」(授業記録と略)と称することが提案されている(横山 2019)。観点2に関しては、授業を分析する際には授業を構成するあらゆる要因を範疇に入れて因果関係や相関関係を関連構造的に把握しながら洞察することが重要である。観点3に関しては、授業分析者はアブダクション(abduction)、すなわち蓋然的推論によって授業記録を解釈し洞察を得ている。C.S. パースが科学的発見の思考方法として提唱したアブダクションとは、「ある意外な事実や変則性の観察から出発して、その事実や変則性がなぜ起こったかについて説明を与える『説明仮説』(explanatory hypothesis)を形成する思惟または推論」(米盛 2007, p.53)を指す。

それでは、「逐語記録に基づく授業分析」の研究方法論に依拠した授業分析者は、どのような研究の問いを設定し、どのような分析の手続によって授業記録を解釈し洞察を得ようとしているのだろうか。そのような研究の過程で、どのような説明仮説が形成されているのだろうか。

2 研究の目的と方法

以上より本研究では、「逐語記録に基づく授業分析」に依拠して音楽科授業の分析を行なっている授業分析者は、どのような研究の問いを立て、どのような分析の手続きによって授業記録を解釈しているのか、研究の過程でどのような説明仮説が形成されているのか、分析事例に基づき個別具体的に明らかにすることを目的とする。このような研究作業は、アブダクションに頼らざるを得ない質的な授業分析の必然性や科学性を問う上で欠かせない。

研究の方法は、以下のとおりである。

- (1) 表1に示した3本の論文で取り上げている分析事例について、どのような研究の問いを立てどのような分析の手続きによって授業記録を解釈しているのかという観点から検討する。なお、取り上げた論文がいずれも筆者が執筆したものである理由は、「逐語記録に基づく授業分析」の研究方法論に依拠して音楽科授業の実践記録を分析し得られた知見を公開している論文が、他に見当たらないためである。
- (2) 「逐語記録に基づく授業分析」に依拠した音楽科授業の分析において、授業分析者が立てる問いの特徴とそれに呼応した分析の手続きを明らかにする。
- (3) 今後の研究課題を示す。

表1 検討対象とした論文一覧

著者(発行年)	論文タイトル
横山 (2014)	社会的相互作用の影響の観点からみた個のイメージの構成過程—「図形楽譜づくり」を教材とした音楽科鑑賞領域の授業の分析—
横山 (2016)	「構成活動」を原理とした音楽科授業における遊びから学習への連続性—中学校特別支援学級での事例の分析を通して—
横山・鈴木 (2022)	歌唱表現イメージの伝え合いを成立させる学習環境要因としての共用の楽譜の機能—《箱根八里》を教材とした歌唱授業の分析—

3 横山 (2014) における分析事例の検討

3-1 分析事例の概要

横山 (2014) で分析対象となっているのは、中学校特別支援学級で実践された、「図形楽譜づくり」を教材とした音楽科鑑賞領域の授業である。この実践では、宮城道雄作曲《さくら変奏曲》を聴きながら、主題の反復と変化について感じ取ったことを色や形で図形楽譜として表し、曲の味わいを紹介する文を書くという学習活動が展開されている。分析場面は、生徒同士の関わり合いが生まれる学習環境の下で《さくら変奏曲》を聴きながら図形楽譜をつくっている活動の様子である。この授業実践の授業記録を分析対象とする際に設定された研究の問いは、「図形楽譜づくり」の過程で、個のイメージがどのような社会的相互作用の影響を受けながら構成されていくのか、というものである。この論文において音楽科鑑賞領域の授業における「イメージ」とは、「外的世界(図形・言語・音楽・身体などの情報)と個の内的世界(記憶・想起・関心・知覚・感受・思考・想像・感情などの心の動き)との間の相互作用や授業構成員間の社会的相互作用によって生成される新しい情報としての心的表象である」(p.15)と定義されている。この定義をふまえて、授業分析者は動的で協働的な学びの過程における個のイメージの構成過程を捉えるために以上の問いを立てて、生徒同士の関わり合いが生まれる学習環境の下で《さくら変奏曲》を聴きながら図形楽譜をつくっている様子がわかる授業記録を分析対象として取り上げている。

分析の手続きとして、次の5つの手続きを踏むことが明示されている。①単元的全過程の映像記録を授業記録として転記する。②音楽を聴くことが苦手な傾向が強かったが、音楽を聴きながら自分なりの味わいを図形楽譜として表現しそれを手がかりに熱心に音楽を聴き教師と対話するようになった生徒Aを抽出する。③その上で、関わり合いの中での個の変容を節目として捉えて授業記録を分節に分け、分析する分節を第二分節前半に焦点化する。④分析対象として焦点化した分節の授業記録から、社会的相互作用の影響を受けながら図形楽譜がつけられていく過程を明示した構造図と分析表を作成し、分析資料とする。⑤以上の手続きに基づき、分析資料を解釈

することを明示している。

3-2 分析事例の特徴

以上、横山（2014）で示されていた研究の問いと分析の手続きを把握した。その内容から、授業分析者が立てた研究の問いは、音楽を聴くことが苦手な傾向が強かったが、知覚・感受したことを表した図形楽譜を手がかりに熱心に音楽を聴き教師と対話するようになった学習者の音楽表現に対する授業分析者の共感が起点となっていることがわかる。このような学習者の音楽表現への共感を背景に、動的で協働的な学びの過程における個のイメージの構成過程を解明するために、「『図形楽譜づくり』の過程で、個のイメージがどのような社会的相互作用の影響を受けながら構成されていくのか」という研究の問いが設定されている。そして、分析手続きや分析方法を明示した上で、授業記録をアブダクションによって解釈している。同時に、研究の問いを探究する研究過程で、個のイメージが作りかえられる過程には教師や他の学び手との関わり合いが影響を及ぼしているに違いないという説明仮説が形成されている。

4 横山（2016）における分析事例の検討

4-1 分析事例の概要

横山（2016）で分析対象となっているのは、中学校特別支援学級で実践された、打つ楽器による音楽創作を教材とした授業である。この実践では、箱を叩いて遊ぶ活動を出发点にリズムを意識した音楽創作に展開させることが意図されている。分析場面は、4人の生徒が紙相撲で使った空き箱を叩いて音を出しながらいろいろな打ち方を試している活動の様子である。この授業実践の授業記録を分析対象とする際に設定された研究の問いは、「構成活動」としての打つ楽器づくりの過程で、衝動的な遊びから思考が働く学習への連続性を生み出す要因は何か、というものである。この論文において、「構成活動」とは「社会的状況において、衝動を起点とし、身体感覚諸器官を使って外界に作品（work）を構成することと関連して内界を構成する活動」（小島 2015, pp.27-28）であるという小島による定義が確認されている。この定義をふまえて、授業分析者は外的な音楽表現と内的な思考の連動に意義を見出す「構成活動」においてどのような要因が衝動的な遊びから思考が働く学習への連続性を生み出すのか捉えるために、衝動的な遊びから始まる音楽創作の様子がよくわかる授業記録を分析対象として取り上げている。

分析の手続きとして、次の5つの手続きを踏むことが明示されている。①単元の全過程3時間分の映像記録から逐語記録を作成する。②衝動的な遊びには没頭するが対話中心の活動は苦手な傾向が強かったが、リズムを意識し対話しながら音楽づくりに取り組むようになった生徒Bを抽出する。③生徒の活動の特徴に着目して逐語記録を4つの分節に分ける。④視点1. 生徒Bの活動の特徴は何か、視点2. 生徒Bの意識の対象は何か、視点3. 生徒Bの意識を音や音楽、音楽

表現を行う自分や他の生徒に向かわせている要因は何か、という3つの分析視点を設定する。⑤分析内容における解釈の記述ルールを明示する。

4-2 分析事例の特徴

以上、横山(2016)で示されていた研究の問いと分析の手続きを把握した。その内容から、授業分析者が立てた研究の問いは、衝動的な遊びには没頭するが対話中心の活動は苦手な傾向が強かったが、リズムを意識し対話しながら音楽づくりに取り組むようになった学習者の音楽表現に対する授業分析者の共感が起点となっていることがわかる。このような学習者の音楽表現への共感を背景に、衝動的な遊びから思考が働く学習への連続性を生み出す要因を解明するために、「『構成活動』としての打つ楽器づくりの過程で、衝動的な遊びから思考が働く学習への連続性を生み出す要因は何か」という研究の問いが設定されている。そして、分析手続きや分析方法を明示した上で、授業記録をアブダクションによって解釈している。同時に、研究の問いを探究する研究過程で、衝動的な遊びから思考が働く学習への連続性を生み出す要因があるに違いないという説明仮説が形成されていると考えられる。

5 横山・鈴木(2022)における分析事例の検討

5-1 分析事例の概要

横山・鈴木(2022)で分析対象となっているのは、高等学校で実践された、《箱根八里》を教材とした高等学校芸術科音楽表現領域歌唱分野の授業である。この実践では、アーティキュレーションを意識しながら4人グループで瀧廉太郎作曲《箱根八里》の歌い方を創意工夫するという学習活動が設計されている。分析場面は、4人で曲の冒頭4小節の歌い方を考えている様子である。この授業実践の授業記録を分析対象とする際に設定された研究の問いは、学習者が歌唱表現イメージを伝え合う状況の成立にグループ活動の中で「共用の楽譜」(学習者が授業でのグループ活動の最中に一緒に使用する楽譜)が学習環境要因としてどのように機能しているのか、というものである。この論文において「学習環境」とは、「音楽科授業において学習者が多様な道具を媒介に関わり合う過程で意味のある学びを展開する際に学習者の内的世界に影響を及ぼす外的世界である」(p.3)と定義されている。この定義をふまえて、授業分析者は学習者同士が関わり合いながら音楽表現を創意工夫していく過程に、学習環境要因としての楽譜がどのように機能しているのか捉えるために、生徒同士で話し合ったり歌ったりしながら旋律の歌い方を創意工夫している様子がわかる授業記録を分析対象として取り上げている。

分析の手続きとして、次に示した5つの手続きを踏むことが明示されている。①発表者は鈴木教諭が実践する授業を参与観察し、その最中に活発に話し合ったり歌ったりしながら活動しているグループを抽出し、映像記録を収集する。②抽出グループの映像記録から「共用の楽譜」が何

らかの役割を果たしていると推測できる第6時を分析場面として抽出し、逐語記録を作成する。③「逐語記録に基づく授業分析」という分析方法、分析資料（解釈の根拠資料）、解釈の記述ルールを明示する。④視点1. 生徒は共用の楽譜をどの程度、どのように使用しながら歌唱表現イメージを伝えていたか、視点2. 生徒はどのような歌唱表現イメージをどのような媒体を通して伝えていたか、という2つの分析視点を設定する。

5-2 分析事例の特徴

以上、横山・鈴木（2022）で示されていた研究の問いと分析の手続きを把握した。この内容から、授業分析者が立てた研究の問いは、話し合ったり声を合わせて歌ったりしながら歌い方について協働で創意工夫しているグループの学習者達の音楽表現に対する授業分析者の共感が起点となっていることがわかる。このようなグループの学習者達の音楽表現への共感を背景に、「学習者らが歌唱表現イメージを伝え合う状況の成立にグループ活動の中で『共用の楽譜』が学習環境要因としてどのように機能しているのか」という研究の問いが設定されている。そして、分析手続きや分析方法を明示した上で、授業記録をアブダクションによって解釈している。同時に、研究の問いを探究する研究過程で、生徒同士が関わり合いながら音楽表現を創意工夫する過程に共用の楽譜が大きな役割を果たしているに違いないという説明仮説が形成されている。

6 まとめ

本研究の目的は、「逐語記録に基づく授業分析」に依拠して音楽科授業の分析を行なっている授業分析者は、どのような研究の問いを立て、どのような分析の手続きによって授業記録を解釈しているのか、研究の過程でどのような説明仮説が形成されているのか、分析事例に基づき個別具体的に明らかにすることであった。そのために、3本の論文の分析事例を検討した。研究の結果を、以下のようにまとめる。

「逐語記録に基づく授業分析」に依拠した音楽科授業の分析において、授業分析者が立てる問いの特徴は、次の3点である。

1. 学習者の音楽表現への共感を起点に、研究の問いが設定されている。
2. 学習者の音楽表現と内面が連動して構成されていく動的なメカニズムを解明するために研究の問いが設定されている。
3. 研究の問いを設定し研究する過程で、学習経験と指導の過程に機能する外的あるいは内的な授業諸要因に関する説明仮説が形成されている。

研究の問いに基づき授業分析を行う際に必要な分析の手続きとして、映像記録の収集、分析資料（逐語記録、授業記録、分析図表）の作成、分析場面の選定、分節分け、抽出する個やグループの選定、分析視点の設定、解釈の記述ルールの明示がなされていた。

以上のまとめを、図2のとおり概念モデルとして示す。

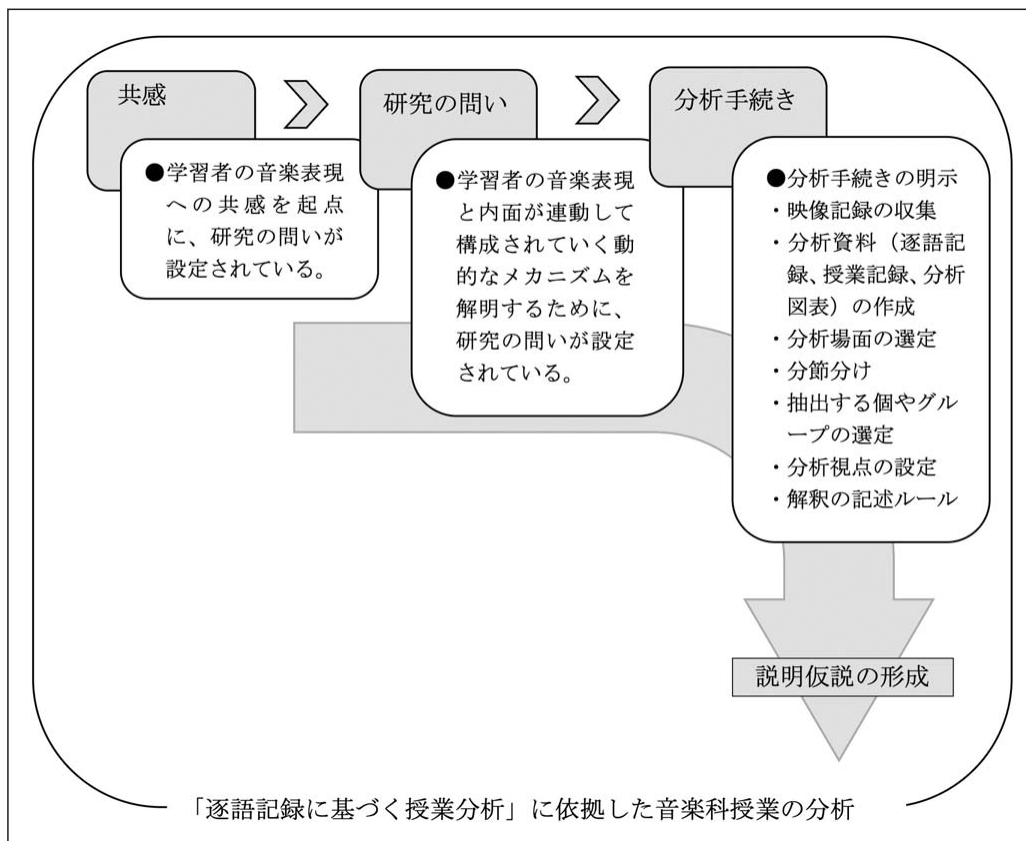


図2 「逐語記録に基づく授業分析」に依拠した音楽科授業の分析における研究の問い・分析手続き・説明仮説

なお、本研究では深く検討することをしなかったが、解釈の根拠資料（授業記録や授業記録に基づいて作成された分析資料）と照合できるように解釈をどのように論述表現するのか、という解釈の記述方法については、授業分析者が個別の分析事例ごとに試行錯誤しており、定式がないことも確認することができた。

そこで、今後の研究課題として以下の2点を確認しておきたい。

- 課題 1. 先行研究では、解釈の根拠資料と照合できるように解釈をどのように論述表現しているのか。
- 課題 2. 解釈を中心とした「逐語記録に基づく授業分析」において研究の妥当性（分析内容の妥当性・記述方法の妥当性・研究方法の妥当性・研究倫理上の妥当性）を問うことができるように、どのように論述表現することが適切なのか。

引用文献

- 小島律子, 2015. (4) 伝統音楽のカリキュラムと教育方法. In: 小島編著, シリーズ新時代の学びを創る 6 音楽科授業の理論と実践. あいり出版. 27-28
- 重松鷹泰, 1961. 授業分析の方法. 明治図書
- 柴田好章, 2013. 第 1 節 授業分析の学術的価値. In: 的場正美・柴田好章編, 授業研究と授業の創造. 溪水社. 21
- 横山真理, 2014. 社会的相互作用の影響の観点からみた個のイメージの構成過程—「図形楽譜づくり」を教材とした音楽鑑賞領域の授業の分析—. 日本教育方法学会編, 教育方法学研究第 39 巻. 13-24
- 横山真理, 2016. 「構成活動」を原理とした音楽科授業における遊びから学習への連続性—中学校特別支援学級での事例の分析を通して—. 日本学校音楽教育実践学会編, 学校音楽教育研究第 20 巻. 3-14
- 横山真理, 2017. 授業分析. In: 日本学校音楽教育実践学会編, 音楽教育実践学事典. 音楽之友社. 224
- 横山真理, 2019. 音楽科授業の特質をふまえた逐語記録に基づく授業分析における記述手法の検討—逐語記録への非言語情報の結合の観点より—. 東海学院大学短期大学部紀要第 43 号. 11-24
- 横山真理; 鈴木健司, 2022. 歌唱表現イメージの伝え合いを成立させる学習環境要因としての共用の楽譜の機能—《箱根八里》を教材とした歌唱授業の分析—. 日本学校音楽教育実践学会編, 学校音楽教育研究第 24 巻. 1-12
- 横山真理, 2023. 「構成活動」を原理とした音楽科授業におけるイメージの発生メカニズム. みずほ出版
- 米盛誠二, 2007. アブダクション 仮説と発見の論理. 勁草書房. 53

付記

1. 本研究は、JSPS 科研費基盤研究(C)21K02560 の助成を受けて実施している。
2. 本論文は、日本学校音楽教育実践学会第 28 回全国大会自由研究口頭発表に基づいて執筆した。